無着造、解深密經疏に就いて

——特に其の第一品——

西尾京雄

一、はしがき

解深密經の經典成立史上、その說處については、十八圓滿の淨土に於いて說かれたものであるとする經典の系統と、穢土に於いて說かれたものであるとする系統とがある。前者は菩提流支が西紀五一四年に譯した深密解脫經、五卷（大一六・六六五頁以下）、玄奘が西紀六四七年に譯した解深密經、五卷（大一六・六八八頁以下）、及び十品より成る譯者不明の藏譯等があり、後者は眞諦の西紀五五八—五六九年の間に譯した解節經——一經と見て——である。此等の外、解深密經には分品として、說處は不明であるが、宋代、求那跋陀羅が西紀四三五—四六八年に譯した相續解脫地波羅蜜了義經、一卷、同じく相續解脫如來所作隨順處了義經、一卷があり、尙、聖典は傳はらないが解節經の說處の王舍城耆闍崛山の如く、毗舍離國鬼王法堂とする穢土を說處とするものがあつたと傳へる。

一般に、大乘佛敎經典の成立を語る人々は多く其の漢譯せられた年代を以つて、先づ第一にその成立を考慮するのであるが、この解深密經に關しては其を取らないのである。卽ち、穢土說法の解節經より淨土說法の深密解脫經がよ

り早く漢譯せられてゐるのであるが、簡古なる解節經より淨土說法のものが附加し發展したと說くのである。而して無着時代に於いては、所謂、解深密經には十八圓滿の淨土の敍述はなく、其は解節經の序品を有する程度のものであつたのであるが、後世、華嚴思想の影響を受けて變遷したものであるといふのである。その證明としてその說く所を要約していへば、

（一）攝大乘論の中、彼果智分第十一、佛土を說く條下に、十八圓滿の淨土について百千經の菩薩藏緣起の中に說くとして解深密經に說くとしてゐない。解深密經は瑜伽行派に於いて最も重要なる經典なのであるから、若し其の時に十八圓淨の淨土の相が存在したであらうならば解深密經を擧げたであらう。

（二）瑜伽師地論、攝決擇分第七十五卷より第七十八卷に引かるゝ解深密經の中に十八圓滿等の序品がない。

（三）攝大乘論、所知相分第三、大乘法を釋する解釋の規則を說く所の薄伽梵の二十德を明す經文は所謂、解深密經の序品に說かるゝ其と等同のものであるが、其の經句に變遷があつて、正しく解深密經の其れではない。

以上、此等を以て其の理由とするのである。此より更に推論して、㊀藏傳、無着造、解深密經疏には十八圓滿のこと、佛德等のことが說かれてゐるから、恐らく無着造のものでないであらうといはるゝ。

が然し、今はこの藏傳、無着造といはるゝ解深密經疏、特に問題なる第一品――この疏の約半分の量を有する――を精査して果して然るかを研し、引いて解深密經成立に關してある考慮を求めようとするものである。

二、本疏の梗概

コルディエ目錄、第三卷、三六一頁――從つて寺本婉雅教授招來になる谷大圖書館所藏、北京版――に於ては、Ni 34.1—14a. Arya-saṁdhinirmocana-bhāṣya. に收められ(東北帝國大學所藏、多田等觀教授招來、デリゲ版目錄では第三九八一番)、勝友(Jinamitra)と戒主覺(Çīlendrabodhi)と智軍(ye-ṣes-sde)との共譯である。僅々、北京版、十四枚の小篇であるが、十〔品〕に分つて釋してゐる。今、玄奘譯、解深密經と、眞諦譯、解節經とによつて其の品を對配すれば、第一〔序品と不可言無二品〕、第二〔過覺觀境品〕、第三〔過一異品〕、第四〔一味品〕、第五〔心意識相品〕、第六〔一切法相品〕、第七〔無自性品〕、第八〔分別瑜伽品〕、第九〔地波羅蜜多品〕、第十〔如來成所作事品〕等である。かくの如く十品に分つ方法は漢譯の其等の經典にはなく、西藏譯の解深密經に於いて見らるゝが、其は菩薩の名を以つて分品すること菩提流支譯の如くである。而して解節經に於いて、不可言無二品第一として序品を含めることは西藏譯に於いても亦、解甚深義密意〔菩薩〕品として序品を分品しないものに同じい。其の方法は又、この無着の疏に於いて見らるゝものであつて、今はこの序品を含める一品のみについて述べようといふのである。

この無着の解深密經疏に就いては、既に Étienne Lamotte によつて Saṁdhinirmocana-sūtra (ed. 1935) の中に、無着の疏として、其の序品を除いた第一品より第四〔品〕(一八二頁—一八三頁)、第五〔品〕(一八七頁)、第六〔品〕(一九一頁)が抄譯、紹介せられてゐる。其の他の品が引用せられてゐないのは、餘品等に於いては經の語釋も施されてゐて、全體に亙つて紹介し難いからであらう。

こゝでは、右の著によつては等閑に附せられてゐるが、我々の現在として問題であるので、所謂序品の解釋を中心とし、兼ねて不可言無二品を含める第一品を紹介し問題としようとするのである。

三、十八圓滿淨土の讃歎

先づ、本疏の始めに於いては、大乘解深密經の因緣(gleṅ-gshi, nidāna)にはとして、解深密經の所謂、序品である十八圓滿の淨土の經句を引用してより、

世尊は勝義の五相を說示せり。勝義の五相とは不可言の相と無二相と過覺觀境相と過一異相と一切一味相なり。其の中、不可言相と無二相とを見るならば、卽ち、解深密經の中、如理請問菩薩が問ひ、廣說はたゞ獨り問はれたるものと知るべきなり。

とある。

次いで、解深密經の中、不可思議の讃嘆は十八種なりとして本經所說の佛土の十八種圓滿の名を列擧する。今、其等の名目について、佛地論の其等と大同少異であるが對照して示すであらう。

數＼典據	佛地論(大二六、二九二中)	戒賢、佛地論	無着、解深密經疏	藏譯、攝大乘論
1	顯色圓滿	ḳha-dog phun-sum-tshogs-pa (varṇa-saṁpanna)	〃	〃
2	形色圓滿	dbyibas° (saṁsthāna-s.)	〃	〃
3	分量°	tshad° (pramāṇa-s.)	〃	〃
4	六所°	yul° (deça-s.)	〃	〃
5	因°	rgyu° (hetu-s.)	〃	〃

6	果°	ḥbras-bu° (phala-s.)	raṅ-bshin	ḥbras-bu
7	主°	bdag-po° (adhipati)	〃	〃
8	輔　翼°	phyogs° (pakṣa-s.)	sham-riṅ-ba	phyogs
9	眷　屬°	sha-ḥbriṅ-pa° (sevaka-s.)	shyogs	sham-ḥbriṅ-pa
10	任　持°	rton-pa° (upastambha-s.)	loṅs-spyod.	〃
11	事　業°	las° (karma-s.)	bya-ba bsgrub-pa	phrin-las
12	攝　益°	phan-ḥdogs-pa° (upakāra-s.)	ḥshe-ba-med-pa	phan-ḥdogs-pa
13	無　畏°	mi-ḥjigs-pa (nirbhaya-s.)	phyir-rgol-pa med-pa	ḥjigs-pa med-pa
14	住　處°	gnas° (pratiṣṭhā-s.)	〃	rten
15	路°	lam° (patha-s.)	bdag-poḥi gnas-kyi bye-brag	lam
16	乘°	bshon-pa° (vāha-s.)	〃	〃
17	門°	sgo° (dvāra)	〃	〃
18	依　持°	gshi° (āśraya-s.)	rten	gshi

此等の名目の中、果圓滿は藏傳、解深密經疏の如く、自體圓滿（raṅ-bshin phun-sum-tshogs-pa）とも言ひ換へらるるもの、第八輔翼圓滿と第九眷屬圓滿とは無着疏に於いては前後となつて居り、第十任持圓滿に對する受用圓滿（loṅs-spyod phun-sum-tshogs）第十一事業圓滿に對する所作成就（bya-ba bsgrub-pa）圓滿等は譯語の相違である。第十二攝益圓滿に對する無災横（ḥshe-ba-med-pa）圓滿は消極的の表現に過ぎない。第十三無畏圓滿に對する無怨（phyir-rgol-pa med-pa）圓滿は表現の相違である。たゞ、第十五路圓滿に對する主住處の差別（bdag-poḥi gnas-kyi bye-brag）は少しく異なるが、道路によつて住處が區劃・整理せらるゝのであるから、道路の意味をいふものと考へられるであらうか。

此等十八圓滿の世界が、受用身の受用土であるのか、其れとも變化身の變化土であるのかは明に觀取せらるゝものではないのである。法相宗々義に依つては前者とするのであるが、今、解深密經の當相より見れば、そこに說かるゝ佛身は法身と化身との二身門であるのであるから、受用身とすることが、既に後期の思想を以つて判別してゐるに過ぎないのである。卽ち、如來成所作事品、第八（大一六・七〇八中―下）に、

如來法身有何等相、佛告二曼殊室利菩薩一曰、善男子、若於二諸地波羅蜜多一、善修出離轉依成滿、是名二如來法身之相一、當知此相二因緣故、不可思議無戲論故、無所爲故、而諸衆生計著戲論有所爲故……

世尊、我當云何應レ知二如來生起之相一、佛告二曼殊室利菩薩一曰、善男子、一切如來化身作業、如二世界起一切種類一、如來功德聚所二莊嚴一、住持爲レ相、當レ知化身相有二生起一、法身之相無レ有二生起一

とある。この法身と化身との二身である卽一の佛陀なるものが解深密經によつて信仰せられてゐるものであつて、受

用身思想については何等考慮が拂はれてゐないものである。其については、次いで佛德讃歎の項によつて關說するであらう。

四、佛德の讃歎

イ、二十德の釋と二十一德の釋

佛德讃嘆については、解深密經及び佛地經に於ける諸經句について、二つの相違ある解釋が古來より行はれてゐる。其の一は總句と別句とによつて釋するもので、最淸淨覺(玄奘譯)(Çin-tu rnam-par-dag-paḥi blo, su-viçuddhabuddhi, 善覺所覺、legs-par-thugs-su-chud-paḥi blo)を總句とし、不二現行以下を別句として二十德に解釋するものであり、其の二は事攝の門より二十一德として釋するものである。

此等の二釋が玄奘に於いては明瞭にせられてゐないが爲に、測疏以來、明判を缺き、攝大乘論等に於ける解釋も(一)「決して前後が一致してゐるのでない」といはれ、測疏の舊(眞諦譯)の二失——一、脫ニ經一句窮末來際ニ、二、或釋云、二十道理便違ニ後說二十一句ニ——に對して、謬解にあらざることを指摘せられつゝも、其等の經句について變遷があつて、攝大乘論と解深密經序品との關聯を容認せられないやうである。

最も十八圓滿の淨土を記す序品を有する解深密經と攝大乘論との直接の關係については、其の佛身思想に於いて內容を異にするのであるから、直接關係せしめることは躊躇するが、其れかといつて、この序品の存在を無着の攝論時代に許さないといふことは、其のまゝ認容せられないやうである。かへつて、この序品を有せる解深密經の存在を許

し、又、無着の解深密經疏を以つて彼の自著と認めて、初めて諸種の事情が順序よく說明し得るであらう。

ロ、窮未來際の經句について

同じく解深密經について、その佛德讚歎の文に所謂、問題となる「窮未來際」の句の存するものと缺けてゐるものとがある。

その一は西藏譯、解深密經には「窮未來際」(phyi-maḥi mthaḥi mur-thug-pa, aparānta-koṭi-niṣṭha)の一句を缺き、無着、解深經疏の經の引用中にも見出すことは出來ない。然るに其の二なる菩提流支譯には「盡未來際」(大一六・六六五・下)とあり、玄奘譯には「窮未來際」(大一六・六八八・中)とある。

次に、この解深密經の佛讚歎の文と等同なるものが攝大乘論に引かれてゐるが、佛陀扇多の譯に於いて「最虛空界盡」(大三一・一〇三・下)とあり、笈多譯に於いて「盡虛空界等」(大三一・二九三・上)とありて、共に「窮未來際」に相當する句は見ることは出來ない。

然るに玄奘譯に於いては「盡虛空性・窮未來際」(大三・一四一・下)とあり、其の藏譯、漢譯四本對照攝大乘論附西藏譯攝大乘論(七九)には同じく「nam-mkhaḥi khams-kyi mthas gtugs-pa phyi-maḥi mthaḥi mur thug-pa」とある。又、眞諦譯に於いては、「虛空界爲後邊」とあつて、(三)宇井博士も指摘せらるゝが如く、「爲後邊」に於いて已に譯されてゐるとも見られ得やうし、全く缺けてゐるものではないやうである。

解深密經のこの佛讚歎の經句の存缺に就いては大體、この二流を見らるゝが、其は初めよりあつたものが缺けたものか、後より其の一句が增加されたものかは容易に決定せらるゝものでない。

ハ、玄奘の傳についての特徴

先づ、玄奘の傳に於いてはこの「窮未來際」の經句を特に重要視してゐるといふことである。其はこの解深密經と同等なる序品を有する佛地經の論に於いて、戒賢の其とを比較して知ることが出來る。

即ち、漢藏二論の佛地經論には、この佛讃歎の經句について、最淸淨覺より盡虛空性窮未來際に至るを佛二十一德を述べるものとして解釋する場合と、最淸淨覺を總句として不二現行以下を別句として二十德として數へる場合とがある。

此等の二つの解釋、即ち、二十一德の釋と二十德の釋とに於いて、戒賢の論では其の區別が明瞭にせられてゐるので、各別なる解釋が、それぞれ獨立的意義を持つてゐるが、親光等の論に於いては明かでないものがある。

其の二十一德の釋に於いては、最淸淨覺を一德と數へず、「不二現行」を以つて、第一一向無障殊勝功德とし、乃至、「極於法界」を以て第十九窮生死際常現利益安樂一切有情功德とし、「盡虛空性、窮未來際」を以て第二十無盡功德とし、以つて二十一種の功德とならないから、その第二十功德を以つて自利利他二德無盡殊勝功德として、自利無盡功德・利他無盡功德の二種の功德として首尾を整へてゐる。

又、次の總句を釋する別句は二十德であるべきであるのに、重ねて二十一種殊勝功德とし、「不二現行」を以つて、第一於所知境一切無障智轉功德とし、乃至、「極於法界」を第十九窮生死際常現起作一切有情利益安樂殊勝功德、「盡虛空性窮未來際」を無盡究竟殊勝功德として、「盡虛空性」を第二十無盡功德、「窮未來際」を第二十一究竟功德として二つに分つ意あるものゝ如くである。

其より、玄奘譯、攝大乘論釋に於いては、論に「無盡功德等」とあるものに對して釋には、

盡虛空性者卽是無盡功德、謂佛智無盡如二虛空一故窮未來際者卽是究竟功德等、言等此佛智究竟窮二未來際一、無レ有二間斷一是故名爲二最淸淨覺一（大三一・三四八・上）

とあつて、親光等、佛地經論の釋と契應し、玄奘譯にのみ見る特分別である。

然るに、この玄奘譯、親光等造の佛地經論に對して、戒賢の論に於いては、其の二十一德の釋について、所謂、「最淸淨覺」を、第一現等覺功德とし、「不二現行」を以て第二無障功德とし、乃至「盡虛空性窮未來際」を以て、「自と他とに於ける利益の根本なるが故に」第二十一無盡功德として、過不足なく二十一種として解釋してゐる。

又、總句を釋する別句の二十德の釋については標と釋との關係として述べられ、二十德であると明記し、「不二現行」を以て第一所知に於いて一向無障功德とし、乃至「盡虛空性窮未來際」を以つて、第二十無盡功德として釋してゐる。

かくの如く、玄奘の佛地經論と戒賢の其との一致する論の條下に於いて、この相違があるのは、そこに何等かの密意があるのであらう。換言すれば、玄奘の相傳に於いて、「窮未來際」が特分別せらるゝのは何か意樂があるであらう。その意樂を汲みとることが佛敎學としての生命のある所であつて、たゞ歷史上の發展としてのみ、經句について附加・增減を決定すべきものでないであらう。

其の密意とは、思ふに、佛地經論のこの佛德を釋す無盡究竟の條下には法相宗々義として著名なる五性各別說が說かれてゐる。其の五性の第五、無有出世功德種性に對して、佛の利他の德である究竟功德を高潮するにあつたであらうか。卽ち、無性有情は諸佛の敎を聞いて善趣に生れても還び退墮して苦惱を受けねばならない。而してこの三惡趣

の熱惱より畢竟じて滅度することが出來ない。これが無性有情である。この窮未來際の出離の緣無き無性有情に對して、其等を濟ふ窮未來際の佛德が無くてはならない。

此處に、「窮未來際」の經句が特分別せられねばならない理由が存するのであらうか。

二、無着菩薩の解釋

この佛德讃歎の經句に對して、二十一德の釋と二十德の釋との兩釋をするやうになつた、その根本の釋は何であるかといへば、其は無着の解深密經疏であるであらう。こゝには、初めに二十德による釋を擧げ、次いで二十一德の釋を列してゐる。今、其等の二釋の中、二十德に據る釋を見るに、

佛の讃歎は、薄伽梵、無上の斷〔果〕と智〔果〕とによつて自利圓滿と、自他二行によつて他利圓滿であつて四分によつて說示するなり。

〔第一分〕善覺の慧と相應すとは〔第〕一分なり。慧によつての所覺は盡所有性(ji-sñed-yod-pa de-sñed-pa, yāvattā)[四]を覺するが故なり。其は又四種なり。善覺の慧とは、內外處[五]の相を現行せざるなり〔第一德〕。深義を覺する慧は法無我に趣くが故なり〔第二德〕。善覺の無垢慧とは菩薩の處に超過するが故なり〔第三德〕。善覺の無上慧とは一切の佛と無差別の故なり〔第四德〕。此等は無上智によつて自利圓滿なり。

〔第二分〕無障の覺を證りとは第二分なり。所覺は盡所有〔性〕を覺るが故なり〔第五德〕。其は又三種なり。無煩惱障覺とは未來時に於ても亦斷じ、其を滅す〔第六德〕と、現在煩惱を生ぜざるが故なり〔第七德〕。其等に於いて無〔業〕異熟障覺とは身不可思議を成立するが故なり〔第八德〕。無所知障覺とは三世に於いて無着・無礙にして平等智

性に到るが故なり〔第九德〕。此〔等〕は無上の斷〔果〕の自利圓滿なり。

〔第三分〕一切世界に住する身と相應しとは第三分なり、無量の衆生の利益を爲すが故なり〔第十德〕。其の住する身は、深密と方便と無雜染と自性とを說示するなり。其の中、深密とは一切の疑を斷ずるが故なり〔第十一德〕。方便とは覩史多天宮に生る等を示現する行なり〔第十二德〕。無雜染とは世間の諸法を無始に於いて各別に證るが故に無雜染なり〔第十三德〕。自性とは煩惱の一切の分別によりて生ぜざるなり〔第十四德〕。この自利によつて他利圓滿なり。

〔第四分〕一切の菩薩の正受する智とは〔第四分〕なり。菩薩の諸智は自智を〔正〕受するが故なり〔第十五德〕。其の正受する智は、自誓と成就と覺との三種によつて說示するなり。自誓とは何ぞや。菩薩は佛と成る法身と一とならんと自誓するが故なり〔第十六德〕。成就とは何ぞや。如來の智〔果〕と斷〔果〕無差別を成就するが故なり〔第十七德〕。覺とは何ぞや。其の二の所依なる眞如〔第十八德〕法界〔第十九德〕を覺するが故なり。其の法界を覺すとは又、法界を極むるが故に聲聞等より殊勝なり。聲聞は涅槃に於いて法界を極む。此〔菩薩〕は虛空界の邊に到り〔第二十德〕と說示す。譬へば虛空は壞の時、若しは成の時に於いても亦盡くること無きが如く、諸佛・世尊も亦現等覺の時、若しは涅槃の時に於いて生死と涅槃に住せざるが故なり。

とあつて、薄伽梵最淸淨覺を不二現行以下の諸句によつて二十德を以つて解釋する釋相となつてゐるのである。

次に、無着の疏に於いては、事攝の門（dños-po bsdu-baḥi sgo）より異門を以つて如來の圓滿二十一を數へて說示してゐる。今、この疏(1)と、戒賢の佛地經論(2)の二十一德と、玄奘譯、攝大乘論(3)（大三一・一四一・下）の二十德の其等

とを順序に記して置くであらう。

一、意圓滿(thugs phun-sum-tshogs-pa)[2] 現等覺功德(mṅon-par-rdsogs-par-byaṅ-chub-paḥi yon-tan)

二、語圓滿(gsuṅ phun)[2] 無障功德(sgrib-pa-med-paḥi yon.)[3] 一向無障功德

三、身圓滿(sku phun.)[2] 調化方便功德(ḥdul-baḥi thabs gyiyon.)[3] 於有無無二相眞如最勝淸淨能入功德

四、住圓滿(bshags-paphun.)[2] 觀所化功德(gdul-bya-la so-sor-rtog-pa yon.)[3] 無功用佛事不休息住功德

五、功德攝持圓滿(yon-tan yoṅs-su-ḥdsin-pa phun.)[2] 與一切佛所作事業相似功德(saṅs-rgyas thams-cad daṅ ḥphrin-las mdsad-pa ḥdra-ba yon.)[3] 於法身中所依意樂作事無差別功德

六、反問授記圓滿(dri-ba luṅ-ston-pa phun.)[2] 斷所治功德(mi-mthun-paḥi phyogs spaṅs-pa yon.)[3] 修一切障對治功德

七、降伏怨敵圓滿(rab-tu-rgol-ba zil-gyis-gnon-pa phun)[2] 降伏外道功德(mu-stegs-can zil-gyis-gnon-pa yon.)[3] 降伏一切外道功德

八、淸淨國土圓滿(shiṅ yoṅs-su-dag-pa phun)[2] 降伏魔功德(bdud zil-gyis-gnon-pa yon.)[3] 生在世間不爲世法所礙功德

九、住處圓滿(gnas phun.)[2] 安立法敎功德(chos-bstan-pa rnam-par-ḥjog-pa yon.)[3] 安立正法功德

一〇、威儀圓滿(spyod-lam phun.)[2]、授記世功德(dus luṅ-ston-pa yon.)[3] 授記功德

一一、變化圓滿(sprul-pa phun.)[2] 顯示(下)示從(二)覩史多天宮(一)來下(上)功德(dgaḥ-ldan-gyi gnas-nas gçegs-pa kun-tu-ston-pa yon.)[3] 於一切世界示現受用變化身功德

一二、聖敎圓滿(bstan-pa phun.)[2] 斷一切種疑功德(the-tshom-gyi rnam-pa thams-cad gcod-pa.)[3] 斷疑功德

一三、隨[1]入一切衆生行圓滿(sems-can-gyis spyod-paḥi rjesu-ḥjug-pa phun.)　一[2]切乘によつて調伏すべきものに其と相似の身を顯示する功德(theg-pa thams-cad kyis gdul-bar-byaba-la de daṅ ḥdra-baḥi sku kun-tu ston-pa yon.)　令[3]入種々行功德

一四、一[1]切趣の行の敎誡(thams-cad-du ḥgro-baḥi las-kyi gdams-ṅag phun.)　善[2]決定の智によつて應ずるが如く敎誨に堪受する功德(çin-tu-rnam-par-ṅes-paḥi ye-çes-kyis ci-rigs-par gdams-ṅag yon.)　當[3]來法生妙智功德

一五、利[1]害に於いて無雜染圓滿(phan-pa daṅ gnod-pa-la kun-nas-ñon-moṅs-pa med phun)　攝[2]受無雜染身功德(kun-nas-ñon-moṅs-pa mi-mṅaḥ-baḥi sku yoṅs-su-ḥdsin-pa yon.)　如[3]其勝解示現功德

一六、依[1]持圓滿(gshi phun.)　佛[2]種姓不斷絕加行功德(saṅs-rgyas-kyi gduṅ rgyun-mi-ḥchad-par sbyor-ba yon.)　無[3]量所依調伏有情加行功德

一七、無[1]厭逆圓滿(mi-mthun-pa med-pa phun.)　住[2]佛自性身功德(saṅs-rgyas-kyi raṅ-bshin-paḥi skus bshugs-pa yon.)　平[3]等法身波羅密多成滿功德

一八、遊[1]戲神通圓滿(cho-phrul-gyis rnam-par-rol-ba phun.)　住[2]如來受用身功德(de-bshin-gçegs-pa loṅs-spyod-rdsogs-paḥi skus bshugs-pa yon.)　隨[3]其勝解示現差別佛土功德

一九、功[1]德無盡圓滿(yon-tan mi-zad-pa phun.)　相[2]功德(mtsham-ñid yon.)　三[3]種佛身方處無分限功德

二〇、自[1]體圓滿(bdag-gi dṅos-po phun.)　得[2]果功德(ḥbras-bu thob-pa yon.)　窮[3]生死際常現利益安樂一切有情功德

二一、涅[1]槃圓滿(mya-ṅan-las-ḥdaḥ-ba phun.)　功[2]德無盡功德(yon-tan mi-zad-pa-ñid-kyi yon.)　無[3]盡功德等

以上、此等二十德の釋と、二十一德の釋とを彼此對照することによつて、攝大乘論に於ける「最淸淨覺」の總句に對する別句の二十の德名が得らるゝことを知るであらう。

この解深密經の經句に對して、二十一德を數へることが傳統として傳へられ、其が二十德を數ふるものと交錯して、その德數が不明となり、更に宗義の發展に對する經證とするの目的も加へられて種々混雜を來したものであらう。

因に、無着疏中、其の二十德の釋に於いて第十二德に變化身、第十六德に法身の德を述べて居り二身門の取り扱ひとなつて居り、二十一德の釋の對照に於いて、戒賢の佛地經論に於いては第十八住如來受用身功德に對して遊戯神通圓滿とあり、親光等の佛地經論に於いて第十九三種佛身方處無分限功德に對して功德無盡圓滿とあるが如く、總じて無着の解深密經疏に於いては受用身の語、三種佛身の思想が特に說かれてゐるのではない。

この事は、この無着疏の成立の古いことを示すであらうと同時に、解深密經がその上に引用せる如來成所作事品に見らるゝが如く、法身と化身との二身門で取り扱ふことが經の當相に契應するものであることを示すものである。

それ故に、この無着疏を根底として佛の二十一德若くは二十德より類推すれば、解深密經の十八圓滿の淨土を以つて受用身、受用土とすることは、三身思想が興隆してより以後、それぞれの分化せる佛身思想を立場とするものより解釋せられた宗義であることを知るであらう。

ホ、攝大乘論に於ける最淸淨慧の解釋

上來の說述によつて、今、この攝論の解釋を研すれば、「最淸淨覺」の總句なる一德を別句たる諸德によつて釋成するものであつて、二十德の釋相に從つて攝論諸異譯を見ればよいものである。玄奘のものは密意に依つてゐるもので

あるから、この佛德の釋に關する限り、之を中心として諸種の論を會通すべきものではないことを知るであらう。

第一に佛陀扇多の譯に於いては、善覺慧は十九種の諸佛功德によつて攝成してゐるといつて、二十種の功德とは言つてゐない。これに對して、宇井博士は「攝大乘論研究」四八二頁に、「然し佛陀扇多譯を見れば、善覺慧は十九の功德の攝成をなすから全體は二十となつて而も窮未來際の句なく」と言つて居らるゝが、十九種功德とあるのは二十種功德とあるべきものゝ如くである。其は第二功德の事非事二相眞如最淨說自然佛所作不休息行功德（大三一・一〇三・下）とあるは玄奘譯の德名との對照によれば、第二句趣無相法の德名は第二於有無無二相眞如最勝淸淨能入功德であり、第三句住於佛住の德名は第三無功用佛事不休息住功德であるのであるから、前者扇多の其は、第二事非事二相眞如最淨說功德、第三自然佛所作不休息行功德との二德名となるべきものであつて、傳寫間に於いて先づ功德の二字が脫落した爲、元來二德であつたものが一德の形になり、其が爲に二十が十九と訂正せられ、そのまゝ誤り傳へらるゝ事情となつたものであらう。而して第二十句、最虛空界盡に對する第二十德名は無量功德といはるゝ。

玄奘譯の盡虛空性窮未來際の二句に對して、無着の解深密經疏のそれに於いては盡虛空性に對して〔無住〕涅槃の德名となつてゐるが如く、窮未來際の語句は義として盡虛空性の中に含まるゝのであるから、別出する要がなかつたものであらう。こゝは、總句の最淸淨慧の總德を別句の不二現行等の別德によつて釋成することを擧ぐるのであるから、換言すれば窮未來際の一句が一德とせらるゝのでないから、省かれてあるのが當然と見るべきものであらう。この意味より攝論のこゝにこの窮未來際の一句がないから、その所依となつた根本の經にも亦、無いのであつて、後世、經句が增加せられ、變遷があつたと確言し得ることでないであらう。

第二に眞諦の譯について、圓測はその解深密經疏（支那版、卷四・二）に於いて二種の失あること、卽ち、一は經の最後句・窮未來際の一句を缺くこと、二は釋論（大三一・一九六・下）に於いて、「初云由二二十道理一成二就如來智慧最淸淨一故　乃至、後云、第一句爲レ本餘二十一句爲三能成就一」とあつて、二十の道理は後說の二十一句に違すといつてゐる。この二失については「宇井博士の攝大乘論研究」四八〇頁以下に明判あるが如く、眞諦の誤と爲すべきものでない。第一失の窮未來際の句については前にも言ふが如く、ある意樂を以つて特分別して來た玄奘譯を以つて、盡虛空性の句の中に含まれてゐる餘意の句を取り出すことはかへつて行き過ぎてゐるからである。第二の失については宇井博士の注意せらるゝが如く、圓測疏のこゝに連引せらるゝ眞諦の記、卽ち、攝大乘論義疏の言には別德二十句とするのであるから、眞諦の譯出の時には餘二十句であつたのが、圓測の時には二十一句となつてゐたものである。又、二十の道理である二十德と、經句二十句とを敢て合致せしめる必要もないであらう。第二十德なる無盡功德を盡虛空性窮未來際の二句とすれば――元來は盡虛空性の一句として窮未來際の一句を含めるものであらう――二十一句でも亦會通せらるゝのである。

かくの如くであるから、眞諦譯も亦、扇多譯と同樣の解釋であつて何等相異なるものでないことを知るであらう。

第三、笈多の譯に於いても「此佛世尊最淸淨覺應レ知攝三餘二十一佛功德一」（大三一・二九三・中）とあるを見れば最淸淨覺に餘の二十一佛功德が攝せられるが如く意味するやうであるが、戒賢によれば、最淸淨覺なる現等覺功德に第一一向無障礙轉功德乃至第二十無盡功德を加へて二十一種功德とするが如く、考へるものであらう。こゝにも亦、盡虛空界等となつて居り、釋には窮未來際の句に及んでゐない。

第四藏譯攝大乘論に於いては、その經句に於いて最淸淨覺(Çin-tu-rnam-par-dag-paḥi blo mñaḥ-ba)不二現行(kun-tu spyod-paḥi gñis mi mñaḥ-ba)乃至、盡虛空性(nam-mkhaḥi khams-kyi mthas gtugs-pa)、窮未來際(phyi-maḥi mthaḥi mur thug-pa)を擧ぐること玄奘譯と同じいのであるが十九種の功德としてゐる。然し、その德名を數ふれば、第一所知に於いて一向無障轉功德乃至第二十無盡功德となつてゐて、二十種の功德を列するから、十九種といふのは二十種の誤といふことが知られる。而して盡虛空性窮未來際の二句は第二十無盡功德を現はすものである。

第五玄奘譯は、盡虛空性窮未來際の二句に對して、論に於いては第二十無盡功德等(大三一・一四一・下)とすることは藏譯と同等であり、論釋に於いては、盡虛空性を無盡功德とし、窮未來際を究竟功德とすることは、無着の解深密經疏に於いて第二十一(無住)涅槃功德とするものを二つに分つたものであつて、こゝに玄奘の傳の特分別の意趣を見るべきものであらう。然し、此は攝論の當面の釋とは逸脫したものであることは肯ぜねばならないであらう。

へ、小　結

上來の所論によりて知らるゝが如く、其等の論に於いては首尾一貫して一致してゐるものの如くである。たゞ玄奘傳に於いてのみ特分別せられ、密意が開顯せられてゐるのであつて、この玄奘譯が考慮の中心とせらるべきものではないのである。

隨つて、西藏譯解深密經には窮未來際の經句を缺くけれども、解深密經成立の當初に於いてこの句が無つたなどと言ふことは斷言し得るものでなく、既に菩提流支の深密解脫經に於いても存在するのである。

然し、何れとするも、この窮未來際の一句は盡虛空性に附隨してゐる經句であつて、その初めには重要なる意味を

持つてゐなかつたのであらう。盡虛空性を擧ぐれば窮未來際の意味が含まれてゐるのであつて、殊更にあげる必要が無かつたものが、この經句の出沒を來した最大原因でなかつたでなからうか。

尙又、或る人はこの攝大乘論の所釋が解深密經に關係無きが如く說くけれども、無着の疏を其の間に介在せしめることによつて、錯綜せる事情が明かとなるであらう。其處に直に無着の疏の德名を擧げないのは攝大乘論は三身門の立場であり、解深密經は二身門を其の內容とするものであるからであらうと考へる。

五、聲聞の德の讃歎

「無量の大聲聞衆と俱なり」以下の聲聞の德を述べる經句に就いては、十三種の德に分つこと圓測の疏(卍續藏、第三四套・四・三一七・上)と同樣である。然し、其の德名が相違し、又、經句を相應せしめる方法も異り、それぞれの德名に契應せしめることも困難である。今、其の德名を擧げよう。

第一、無二圓滿(gñis-su-med-pa phun-sum-tshogs-pa)

第二、善調順(ḳin-tu-dul-ba)圓滿、

第三、讃(bshags-pa)圓滿、

第四、高(khrun)圓滿、

第五、寬深(rgyal)圓滿、

第六、隨順道を行くが故に行(mthun-paḥi lam-du ḥgro-bas ḥgro-ba)圓滿、

第七、捷（myur-ba）圓滿、
第八、遠行（riṅ-du-ḥgro-ba）圓滿、
第九、賢行（ḥgro-ba bzaṅ-po）圓滿、
第十、勝淨（yoṅs-su-sbyod-pa）圓滿、
第十一、寂靜（ñe-bar-shi-ba）圓滿、
第十二、和會樂（ḥgrogs-na bde-ba）圓滿、
第十三、自在（dbaṅ-du-gyur-pa）圓滿、

今、此等の中、第一無二圓滿は「一切調順」の經句に相應するものであらうか。測疏に智度論・卷三（大二五・八一・上）の文を引いて三釋を紹介してゐる。卽ち、

依智度論第三卷中、有三三復次一、釋二心調順一、一約二三種順違一、以釋二調順一、一恭敬罵詈心等無異、二珍寶瓦石、視レ之無レ異、三持レ刀斫レ身栴檀塗レ身亦等無レ異、
二約二利鈍根本煩惱已斷一以釋二調順一、
三約應貪不貪・應瞋不瞋・應癡不癡、守二護六情一、以釋二調順一、

とあるが、此の中、第一復次の釋が、この無二圓滿の德名に相應するものであらうか。

第二善調順圓滿は測疏に於いては、第一德の德名であつて「一切調順」の經句のものとするが、この本疏に於いては「皆是佛子」に相當するものであらう。

第三讃圓滿以下第九賢行圓滿に至るものは、其の德名と經句とを相應せしめ難い。第十勝淨圓滿は測疏の第十一勝淨福田德に相應して「大淨福田」の經句に名づけ、第十一寂靜圓滿は測疏の第十二威儀寂靜德に當りて「威儀寂靜無不圓滿」の經句、第十二和會樂圓滿は測疏の第十三忍辱柔和德に當りて「大忍柔和成就無減」の經句に名く。

第十三自在圓滿は、測疏に於いてはこの聲聞の德を述べる經句を三に分ち、初標數辨類、次廣釋諸德、第三顯已奉行とする中、第三であつて、十三德の中に數へないのであるが、無着の疏に於いては「已善奉行如來聖教」を以つて其の德名の所依とするものゝ如くである。

六、菩薩の德の讃歎

菩薩の德の讃歎は大處、卽ち大乘に悟入するが故であつて、其の大乘に悟入するのは道の九種の過(skyon, ādinava)を斷ずるからである。而して其の經句に對して、佛地經論、卷二(支那版・一七右)に於いては德大九種と業大一種との十種に、或は十地に應釋し、更に十到彼岸・十大願等に配釋すべもことを述べてゐるが、本疏に於いては九種の過を斷ぜし德として配釋すべきやうである。その九過とは、

第一、正菩提に順ぜざる道(rdsogs-paḥi byaṅ-chub mi-mthun lam)

第二、有塵(rdul-bcas-pa)

第三、有刺(tshel-mar-bcas)

第四、失壞(chuṅ-za ḥjig)

第五、不樂（bde-med）

第六、有畏（hjigs-bcas）

第七、無種性（ris-min）

第八、無對治（phyogs-min）

第九、趣（hgro）

等であつて、此も亦、それぞれの經句に相應せしめ難いやうである。

今、試に經句を配當すれば、第一正菩提に順ぜざる道過は、其の對治である「皆住大乘、遊大乘法」の經の二句で、中邊分別論（釋疏、一一八頁）の菩提障を述ぶる菩提の三障、卽ち、一不レ生二善法一、二不レ起二正思惟一、三資糧未圓滿をいふものであらうか。

第二有塵過は、其の對治である「於二諸衆生一其心平等」の經句で、無亂の三障の中、第一顚倒の麤重の有人の釋に「我等無なるに我等分別するは顚倒なり」（中邊分別論釋疏・一二三頁）と言ふに相應せしめ得るであらうか。

第三、有刺過はその對治である「離諸分別及不分別種々分別」の經句に相應せしめ、瑜伽論、八三（大三〇・七六五・下）に五種の道過失を擧げてゐる「言二有刺一者謂一切處多二毒刺一」といふにも通じて理解すべきものであらう。

第四、失壞過は其の對治である「擢諸魔怨・遠離一切聲聞獨覺繫念分別」の二經句、第五不樂過はその對治である「廣大法味、喜樂所持」と正しく相應するのであらう。瑜伽論、八三卷の二種道障の不樂も亦參考せらるべきであらう。

第六、有畏過は其の對治の經句「超五怖畏」と決定し得べく、瑜伽論の五種道過失の第二「言二有怖一者謂有二盜賊及矯

詐一故」と第二「言二有畏一者謂涉二稠林一故、有二諸惡獸及與非人諸恐畏一故」とに相應せしめ得べきである。

第七、無種性過の西藏譯は ris-min であつて、鈴木大拙著、「梵文楞伽經梵漢藏索引」には ris に gotra の語を見出すので agotra の意味として、無種性と譯したのである。其は中邊分別論〔釋疏・一二二頁〕の攝受、卽ち發菩提心の三障の第一闕二種性一に相應するであらう。その經句はその對治である「一向趣入不退轉位」であるであらう。

第八、無對治過、第九趣過の二過の對治の經句は最後句「息諸衆生一切苦惱所逼迫地而現在前」に契應せしめ得るであらう。佛地經論、卷二(支那版、一六右)に於いては業大を現はすものであつて、內苦(病苦等)、外苦(貧苦等)の二種の對治とするが、一切の苦惱の潛伏する邊より第八無對治過、其の現前するより第九趣過の二ともすることが出來るであらうか。前者は中邊分別論〔釋疏・一二四頁〕の無障の三障、卽ち、一俱生麤重、二懈怠性、三放逸性に關係するであらうし、後者は瑜伽論、八三(大三〇・七六五・下)に於いて「弊趣、惡趣者顯二示趣過失一」といふに合せて考ふべきであらう。

七、不可言相と無二相

以上によつて、無着、解深密經疏、第一〔品〕二節の中、第一節である所謂序品に就いて述べ來つたのであるが、此より第二節の不可言無二品について關說するであらう。卽ち、疏に於いては前述せる菩薩の九過を擧ぐるについで、勝義の五相を說くは、卽ち、智慧波羅蜜品の中に不思議(acintya)と無比(atulya)と無量(apramеya)と無數と(asaṃkhyeya)無等等(asamasama)の義を出すと次第の如くなり。

阿含(lai, āgama)と覺(rtogs-pa, pratipatti)とに無增益と無損減とに於いて愚の對治は、無二〔相〕と不可言〔相〕とを示すなり。

名の前に覺無きが故に、多〔名〕の故に、決定せざるが故に、無二を成ずるなり。本師によつて施設せる句あると、種々の遍計によつて言辭ありて成實ならず。然し、聖者の相續中、世俗智(kun-rdsob-kyi çes-pa, saṃvṛti-jñāna)と勝義智(don-dam-paḥi çes-pa, paramārtha-jñāna)と〔聖〕見(mthoh-ba, darśana)等によつて三自性を假設するは、不可言相なりと知るべきなり。

本師の假設の句とは遍計の自性を施設するが故なり。言說は事無きには非ざるなりとは依他を施設するが故なり。離言〔法性〕を現等覺すとは圓成實を施設するが故なり。

堅固に取る(mchog-tu gzuṅ)とは自己の見(lta-ba)によつて堅固〔最勝〕に取つて住するなり。執着(mṅon-par-shen, abhiniveśa)とは他者が其より離るゝものを執つて捨てざるものなり。是の如き義を表知すべきが故にとは、㊇義あるものは名なりと〔表知すべきが故に〕なり。この第一品を說き竟れり。

とあつて、阿含の上より無二相と覺の上より不可言相とを說いてゐる。

此等の解釋の中、第一、勝義の五相といふについては、瑜伽論、卷七五(大三〇・七一三・下)に說くものと同ずるものである。卽ち、圓測の疏に於いても亦、瑜伽論の說相と解深密經の勝義諦の其に對する相違について次の如く述べてゐる。

㊆今此中說二勝義諦一依二瑜伽論一判二此品一中、辨二五種相一故七十五云、復次勝義諦有二五相一、一離名言相、二無二相、三

超過尋思所行相、四超過諸法一異性相、五遍一切一味相、

今依二此相一、攝爲二四段一、一明離言及無二相、二爾時法涌以下明二超過尋思所行相一、三爾時善淸淨慧下辨二非一異相一、四爾時世尊下釋二遍一切一味相一、五中離言應レ通二四段一、四相皆有二離言相一故、而與二無二一處合說、准可レ知故、

この圓測の解釋は別として、勝義を五相と分つ方法が、既に無着の疏の上にありて、其が瑜伽論の上に現はれたものであると見ることが出來るであらう。又、この五相を般若經、一四(大八・三二七・中)一七(大八・三四五・中)等によつて、其の根據を置くものであると指摘する解釋も亦、其の思想發展の上より適當なるものであつて、無着の疏として首肯せられ得るものであらう。

第二に「名の前に覺無きが故に、多〔名〕の故にと決定せざるが故に」との句は攝大乘論、卷中(大三一・一四〇・上)、顯揚聖教論、卷一六(大三一・五五七・下)に、

由名前覺無　多名不決定
成稱體多體　雜體相違故

とあつて、言說は事無きにはあらざる依他法と本師の假設の語なる遍計法とは同一相に非ざる道理を成ずる頌であるが、この本經疏の中に見出さるゝものである。

八、結　論

上來、藏傳無着造とせらるゝ解深密經疏の第一品について述べ來つたことであるが、其によつて知らるゝやうに、

そこに十八圓滿の淨土の相、及び佛德等のことが說かれてゐるにしても攝大乘論所說の其れとは內容の淺深を異にしてゐるものであるから、たゞその表面のみを見て、簡單にその著者性を決定し得るものではない。

更に本經疏の一部始終に渡つてその釋相を見るに簡素であつて、よく經の當相と契應してゐるから、之を無着造とすることによつて、思想的順序が說明せられ、一見變遷ありと見られ得る經句も亦、秩序あることが說明せられるやうである。

此より、この藏傳、解深密經疏を以つて無着造と決定せられようし、無着時代には當然、この十八圓滿の淨土の說相を持てる解深密經は成立し得たであらう。

思ふに佛敎經典の一經の成立史を考ふる上に於いて、歷史的發展の上に一より一へと附加・增廣がなされたものであることは考慮せねばならないが、其のことのみによつて容易に決定し得るものでないであらう。圓測は解深密經の異譯の諸本の相違するについて、それぞれ譯家が異り、又、梵本が異なるものであらうと言つてゐるが、其のことは內面的に譯家の傳持せる聖典の傳統相承の思想・信仰の相違もあるであらう。其等の究明なくして一經成立の前後を決定することは早計であると言はなくてはならないであらう。

註㈠　宇井伯壽著、攝大乘論研究、六〇頁。

㈡　右同、四八二頁。

㈢　右同、四八八頁。

㈣　解深密經、卷第三(大一六・六九九・下)、盡所有性者謂諸雜染淸淨法中、所有一切品別邊際、是名二此中盡所有性一如二五數蘊・六數內處・六數外處一。

㊄ 無性・攝大乘論釋(大三一・四〇九・下)、或二處現行、此中無レ有二如是所說二種現行一、是故說名二不二現行一、由レ此故名二最淸淨覺一。

㊅ この譯の本文は don gaṅ yin-paḥi ñid-kyi miṅ とある。

㊆ 解深密經疏卷一、卍續一、三四套・四・三二三・左。

㊇ saṃdhinirmocana-sūtra, p. 182. Aṣṭasāhasrikā, chap. 13.